

# ラーニングスキル演習実施報告

岡 田 真理子

## 1. はじめに

本稿は和歌山大学経済学部エキスパートコース(以下ECとする)1回生を主な対象として開講されているラーニングスキル演習Ⅰ(EC)およびラーニングスキル演習Ⅱ(EC)の教育効果分析を目的とする。はじめに、ラーニングスキル演習の導入経緯を概説することにより、ラーニングスキル演習に期待された教育効果を明らかにする。次に、ラーニングスキル演習の内容を詳説することにより、ラーニングスキル演習によって学生が獲得する能力を明らかにする。最後にラーニングスキル演習の教育効果を分析し、教育効果が学部教育にとって持つ意義と今後の課題を明らかにする。

## 2. ラーニングスキル演習の導入経緯

2009年度頃から教育改革プロジェクト<sup>1)</sup>に参加する教員が、和歌山大学経済学部において開講されている少人数授業科目<sup>2)</sup>および一部の学部講義において「論理的思考能力」を形成するためのさまざまな試行を行い、一定の成果を得てきた<sup>3)</sup>。論理的思考能力は大学教員にとっては研究遂行上に必要な能力であり、演習や講義において学生に論理的思考能力を教育することは実施可能ではあったが、次のような能力については既存の大学教員では教育実施が困難な分野として浮かび上がってきた。

既存の大学教員では教育実施が困難な分野としてあらわれてきたのは、論理的思考能力形成のための様々な取り組みのなかでも特に、「クリティカル・シンキング」と「ファシリテーション」といった技術的能力形成の分野である。これらの形成すべき能力は論理的思考能力の基礎部分となるものである点で重要であるが、技術的要素が高いために大学教員にとっては暗黙知のレベルにすでに落とし込まれているため、既存の教員では教育実施が難しいと考えられる。

そこで、これらの技術的基礎的能力形成のための授業科目開講に先立って、外部講師をプロジェクトで招聘してプロジェクト参加教員を中心に研修を実施した。研修内容は主にクリティカル・シンキングに関するものであった。研修の結果、プロジェクト参加教員の間では、

- 
- 1) 2013年度は「アクティブラーニングの体系的導入による汎用能力(ジェネリックスキル)の育成事業」を課題として和歌山大学学長裁量経費による教育改革推進プロジェクトが実施された。
  - 2) 少人数授業科目には「基礎演習Ⅰ」(1年前期)、「基礎演習Ⅱ」(1年後期)、「専門演習Ⅰ」(3年)、「専門演習Ⅱ」(4年)などが主にある。
  - 3) 2011年度『研究年報』におけるプロジェクト報告「【小特集】大学における「読み書き」教育の再検討 - 2010年度教育改善推進事業報告 -」参照。

論理的思考能力の技術的基礎的能力形成を実施することによる教育効果についての一定以上の手ごたえが共有された。さらに、それまでもキャリアセンター経済学部において「スチューデント・リーダー研修」として同様の教育を実施することにより、教育効果が得られていることもプロジェクト参加教員が共有した手ごたえを支えるものであった。

以上のような経緯により、論理的思考能力形成のための基礎部分となる技術的能力を専門の外部講師による演習を実施するなかで形成していくことについて、プロジェクト参加教員の間で合意された。学部教育における論理的思考能力形成の必要性についてはすでに報告書の形でも認識が明らかになっていることから、外部講師を選定して演習実施する準備に着手することになったが、ここで課題となったのが予算上の制約である。経済学部には1学年に300名を超える学生が所属しており、300名超の学生に対して外部講師を手当てするだけの学部予算支出について実施初年度から整えることは現在の旧国立大学がおかれた現状からは困難であった。

そのため、教育実施の初期段階においては経済学部ECに所属する1年生に対していわばトライアルの形で授業科目を開講し、教育効果を測定しながら学部学生全体に対象を拡大していく道を模索していくこととなった。ECは経済学部のなかでも特に学ぶ意欲の高い学生を選抜したコースであり、定員は20名<sup>4)</sup>となっている。初年度はEC64期生を主な対象として1年前期の「基礎演習Ⅰ(EC)」終了後に「ラーニングスキル演習Ⅰ(EC)」を、1年後期の「基礎演習Ⅱ(EC)」実施期間中と終了後に「ラーニングスキル演習Ⅱ(EC)」を、それぞれ集中講義<sup>5)</sup>の形式で開講することとなった。

### 3. ラーニングスキル演習Ⅰ(EC)

ラーニングスキル演習Ⅰ(EC)は染屋光宏氏<sup>6)</sup>が非常勤講師として演習担当し実施された。ラーニングスキル演習Ⅰ(EC)は大きく分けて前半の「コミュニケーション研修」と後半の「タイムマネジメント研修」のふたつからなる。

#### 3-1 コミュニケーション研修

コミュニケーション研修は論理的思考能力形成に関して最も基礎となる部分である。論理性のある思考をした結果、もしくは思考のプロセスにおいて他者とのコミュニケーションは必須となる。大学教育のみならず社会人として人生を歩んでいく際にも基本となる能力としてコミュニケーション能力は位置づけられている<sup>7)</sup>。よって、ラーニングスキル演習Ⅰ(EC)

---

4) 経済学部64期生までは定員40名であった。現在の1年生である66期は28名が所属しており、定員を若干オーバーしている。これはEC担任の選抜における判断によるものである。

5) Ⅰ、Ⅱともに4日間、各日10時から17時（最終日のみ16時）のスケジュールで開講された。

6) 株式会社日本チームコーチング協会取締役、ソウルビジョン代表。

では、はじめにコミュニケーション研修がプログラムされている。

コミュニケーション研修は主に、コミュニケーションの基礎である「傾聴・質問・承認」に基づいて構成されている。はじめに「コミュニケーションとは？」として、コミュニケーションの意味が説明される。コミュニケーションは常に他者との間に存在する関係性であり、自分の言動が他者になんらかの内的反応（影響）を与え、与えられた影響が他者の外的反応（言動）を生み出し、他者の言動が自分に影響を与え、自分に与えられた影響が他者への言動を生み出す。このようにコミュニケーションはキャッチボールに似たサイクルが続くことによって良好に成立する。コミュニケーションはサイクルがスムーズに続くことが重要であり、そのためにはお互いに内的反応から生じた外的反応を注意深く観察することが必要となる。このことを染屋氏は「コミュニケーションに失敗はない。あるのはフィードバック（情報）だけだ」と説明する。以上のような解説がなされた後、受講学生はコミュニケーションゲームを行い、主体的に観察力を身に着けるためのポイントを学ぶ。

### 3-1-1 傾聴

コミュニケーションにおける観察力の重要性を認識したうえで、コミュニケーション能力の基礎である「傾聴」に関する演習が行われる。「傾聴」は単なる「聞く」とは異なり、他者の言動を注意深く観察しながら「聴く」ことである。

【写真1】は傾聴を学ぶ前の演習を受講する学生の様子である。【写真1】における学生は「傾聴」ができていない、つまり、コミュニケーションがうまく取れていない状況となっている。この時点で、学生たち本人はもちろんのこと、多くの人が「コミュニケーションが取れていない」状況であることにはあまり気づいていない。

「傾聴」にはコミュニケーションの相手との距離、姿勢、視線の位置、ペーシング<sup>8)</sup>など、必要な要素がいくつかある。すべての要素がコミュニケーションを円滑にし、観察力を高めるためのものとなっている。演習では、これらの要素がコミュニケーションにとって重要であることをいくつかの体験型学習で学生に認識させる。そ



【写真1】「傾聴」を学ぶ前の演習の様子

- ✓ 7) 例えば、経済産業省の「社会人基礎力」には「チームで働く力」のなかにコミュニケーション能力として「発信力」や「傾聴力」が含まれている。
- 8) うなずいたり、相手の話の内容を要約して繰り返したりするコミュニケーションスキル。

の結果、学生の演習における参加態度は【写真2】のように変化する。

ほとんどの学生が背を椅子の背もたれから離し、コミュニケーションの相手に対してやや前傾姿勢となっている。【写真1】では足を組む姿勢の学生がいたが、【写真2】ではそのような姿勢はなくなっている。ほんの少しの変化であるが、コミュニケーションサイクルに主体的、積極的に関与する姿勢に変化することで、コミュニケーションの質が高まる。

さらに傾聴のスキルに関するアクティブラーニングを続けることにより、【写真3】のように、学生は他者がプレゼンテーションしている場合には身体を話し手の方向へ向かわせてコミュニケーションをとるようになる。



【写真2】「傾聴」を学んだあとの演習の様子



【写真3】「傾聴」ができている様子

### 3-1-2 「承認」

演習1日目は、コミュニケーションの概説および観察力を高めるためのワークと、「傾聴」に関するアクティブラーニングでほぼ終了する。若干の余った時間で「承認」に関するスキルを学ぶ。「承認」はコミュニケーションの基礎の中でも最も重要なものとされるが、基礎的スキルのなかでも難易度が高いため、学部学生向けの演習では割かれる時間が比較的少ない。「承認」よりは「傾聴」と「質問」に時間を割くのがラーニングスキル演習I (EC)の内容となっている。

少ない時間ではあるが、「承認」についてのワークを行うことで、学生はコミュニケーションの基礎の重要性を学ぶ。とくに一日目に「傾聴」と「承認」を組み合わせることで、「承認」のワークを通して「傾聴」の重要性を学ぶ。

### 3-1-3 「質問」

ラーニングスキル演習I (EC)のコミュニケーション研修において最も重要なスキルは「質問」である。なぜならば、コミュニケーションスキルを身につけて、基礎演習や専門演習な

どにおいてディスカッションを行う際に、議論を進ませる力をもつのは「質問」であるからである。

演習では「質問」には人やものごとを動かす力があり、動かす方向性が質問の種類によって異なることが説明され、実際のワークを通して体感できる。コミュニケーションの際に、批判や否定ではなく代わりに「質問」を行うことでコミュニケーションが円滑に進むことや、質問の種類（「どうして」「なぜ」などの原因追求型の質問と「どうすれば」などの問題解決型の質問）によって相手の感覚やものごとの進み方が変化することを学ぶ。

はじめに、「質問」のスキルの基本が説明される。質問のスキルの基本にはいくつかあるが、「批判・否定の代わりに質問を」、「教える・指示する前に「ど」のつく質問を」など、コミュニケーションを前に進ませる基本ポイントがある。批判・否定や教示・指示によって終了してしまうかもしれないコミュニケーションサイクルを、質問をすることによって回し続けることができる。つまり、質問にはコミュニケーションを円滑に動かし続ける力がある。

さらに、「質問」の持つ力を体感するワークを行う。担当講師が人生のそれぞれのステージにおける出来事を強くイメージするように指示をだす。たとえば、「小学校の最初の夏休みに、誰とどこに行きましたか？」という質問に対し、受講生は声には出さずに頭の中で質問に対する回答をできるだけ具体的にイメージする。すると、質問の変遷に伴って、自らがライフヒストリーを時系列で実際に動いているような感覚を覚える。このように、「質問」には実際に人を動かす力があることが理解できる。

「質問」には人を動かす力があることが理解できたところで、「質問」が持つ力には方向性があり、方向性の違いによって人が動かされる方向性に違いがあることを実際に経験するワークを行う。受講生は、一つの同じ質問を最初に提示し、以降のコミュニケーションを「どうして?」「なぜ?」という質問を繰り返すパターンと、「どうすれば?」という質問を繰り返すパターンの2種類のパターンをワークする。「どうして?」「なぜ?」は「原因追求型」の質問とよばれ、最初に提示された質問に関して回答者が抱えている原因を追究していく質問となる。よって、「質問」の持つ力の方向性としては、回答者の内側へ奥底へと向かうことになる。一方、「どうすれば?」は「問題解決型」の質問とよばれ、最初に提示された質問に関して回答者自らが解決策を考える質問となる。よって、「質問」の持つ力の方向性としては、回答者の外側へ上方へ向かうことになる。実際に、質問を繰り返すと、「どうして?」「なぜ?」の質問の間は回答者の目線が下向きになりがちとなる。これは、「原因追求型」の質問が内側に向かう方向性を持っているからである。「どうすれば?」の質問の間は回答者の目線は上向きになりがちとなる。これは、「問題解決型」の質問が上方に向かう方向性を持っているからである。

「質問」にはそれぞれ異なる方向性を持つ力があることを理解し、適切な場面で適切な質問をすることで議論が意味のあるものになっていくことが深く理解できる。「質問」に対す

このような理解が、大学における学びのみならず卒業後の社会生活においても、コミュニケーションを円滑かつ意義のあるものにする助けとなる。その意味において、大学教育におけるコミュニケーションの基礎のなかで「質問」が最も重要になってくると考えられる。

#### 3-1-4 コーチング

コミュニケーションの基礎である「傾聴」「質問」「承認」を組み合わせたコミュニケーションスキルとしてコーチングが紹介される。コーチングは高度なスキルであり、学生には紹介されるだけで実践はなされない。しかし、コミュニケーションスキルのいわば集大成としてコーチングが紹介され、実際の企業の現場で効果をあげていることが紹介されることは、学生にとってコミュニケーションスキルを身につけることの意義を具体的に体感することにつながる。コミュニケーションスキルの具体的意義を理解することによって、学生はラーニングスキル演習 I (EC) の前半課程について具体的総合的に理解することになる。

#### 3-2 タイムマネジメント研修

ラーニングスキル演習 I (EC) の後半はタイムマネジメント研修が行われる。はじめに「なぜタイムマネジメント(時間管理)は必要なのか」という問いが出される。タイムマネジメントや計画を立てる際に、往々にして人は「時間」を「管理」しようとする。しかし、タイムマネジメントの必要性を最初に考えると、欲しいもの(成果)や届きたい目標のためにタイムマネジメントをする必要があることが分かり、成果や目標はまさしく最終的なアウトカムであることが分かる。最終的なアウトカムは中途ではコントロールすることができない。アウトカムが求められるときにコントロールすることが可能な要素は「行動」や「価値観」である。特に、「価値観」(BE)が「行動」(DO)に影響を与え、「行動」(DO)が「成果」(HAVE)に影響を与えることから、成果のためにタイムマネジメントするには「価値観」が最も重要であり、「価値観」を基準に「時間」を「配分」することが必要となることを理解する。タイムマネジメントにおいて「時間」は「管理」するものではなく「配分」するものであり、「配分」のための基準は「価値観」であるので、自分がなにをどのように考えているのかについて考察することが必要であることを理解することで、学生はこれまでの時間の使い方に関する考えを大きく変化させるようになる。

「価値観」が重要という点はコミュニケーション研修とつながるところがあり、この点でラーニングスキル演習 I (EC) の前半と後半はリンクされることになる。自らの「価値観」とコミュニケーションすることの重要性に学生は気づかされる。

##### 3-2-1 優先順位をつける

タイムマネジメントにおいて「価値観」に基づいて「時間」を「配分」する方法として、「優

先順位をつける」やりかたが次に紹介される。「価値観」に基づく「時間」の「配分」の際に、「緊急性」と「重要性」という軸を用いる方法である。横軸に「緊急性」を、縦軸に「重要性」ととると、第1象限は「緊急性、重要性がともに高い事項」、第2象限は「緊急性は低い、重要性が高い事項」、第3象限は「緊急性、重要性ともに低い事項」、第4象限は「緊急性が高い、重要性の低い事項」という区分となる。多くの人にとって第1象限がタイムマネジメントにおいて重要視されることは言うまでもないが、ロングスパンで人生を見た場合に第2象限（緊急性低、重要性高）が重要であることが紹介される。学生の多くがタイムマネジメントを比較的短い期間の範囲で考えているため、「重要性が高いことが重要」という考え方はインパクトを持つ。演習後に行ったアンケートにおいても「第2象限を大切にしていきたい」という記述回答をした学生が多く見受けられた。このようにタイムマネジメント研修では時間管理をする際に、これまで学生が持っていなかった、しかしながら大変重要なポイントが紹介される。

以上のような区分に基づいて各象限ごとに優先順位をつけてタイムマネジメントをすることが重要であることを学ぶことになる。そして、優先順位をつける際には第1象限（緊急性高、重要性高）だけではなく、第2象限（緊急性低、重要性高）が人生において重要であることを留意することが必要であるという認識を学生は持つようになる。

### 3-2-2 先行管理

次に、具体的なタイムマネジメントの方法として「先行管理」について学ぶ。3-2-1でみたような「価値観」に基づく「時間」の「配分」を行う際に、多くの学生が「短い」単位の時間管理を積み重ねる方法でタイムマネジメントを行っている。たとえば、第1象限にある事項について「9時30分から10時30分まで」、第2象限にある事項について「11時から13時まで」というように各事項に時間を配分する行動を積み重ねる形で24時間を形成し、そのような24時間を積み重ねる形で1週間をとという方法でタイムマネジメントを行っている。

しかし、実はこのような方法では「価値観」に基づく「成果」を得ることが難しいことが紹介される。「価値観」に基づく「成果」を得るためには、「長い」単位の時間管理から「短い」単位の時間管理へと具体的な落とし込みを行っていく「先行管理」を行うことが重要と説明される。つまり、「価値観」に基づく人生のビジョンを描き、そのビジョンを実現させるために必要な「年間計画」を立て、「年間計画」を実現させるために必要な「月間計画」を立て、「月間計画」を実現させるために必要な「週間計画」を立て、「週間計画」を実現させるために必要な「当日計画」を立てるという方法が「成果」を手に入れるために必要であると説明されるのである。

人間の持つ「価値観」が抽象度の高いものであることを考えると、「価値観」に基づくタ

イムマネジメントはロングスパンで考えざるをえなくなることから、上記のような「先行管理」は「価値観」に基づく「成果」を得るために有効な方法であることがわかる。「先行管理」もまた3-2-1で述べた優先順位のつけ方と同様に学生にとってはインパクトの強いものであり、多くの学生が演習後のアンケートにおいて「先行管理」の必要性について触れている。

### 3-3 ラーニングスキル演習 I (EC)のまとめ

これまで見てきたように、ラーニングスキル演習 I (EC)ではコミュニケーションにおいてもタイムマネジメントにおいても自らの「価値観」を認識することがすべての基本となっている。さらに、「価値観」がコミュニケーションやタイムマネジメントにおいて具体的にどのように必要となってくるのが方法論として紹介される。これらのことを学ぶことによって学生はこれまでのコミュニケーションやタイムマネジメントに関する考え方を新たにし、その必要性について強く認識する。そのような認識が学生個々人の学生生活を、さらには卒業後の人生を意義のある充実したものとする。

## 4. ラーニングスキル演習 II (EC)

ラーニングスキル演習 II (EC)は早津俊秀氏<sup>9)</sup>が非常勤講師として演習担当し実施された。ラーニングスキル演習 II (EC)はいわゆるクリティカル・シンキングの手法を学ぶ演習であり、「物事の考え方」の考え方を学ぶ内容となっている。

### 4-1 枠組み演習

ラーニングスキル演習 II (EC)では、はじめに「物事の考え方」の考え方の基本的なフレームワークとして「枠組み演習」を学ぶ。「枠組み演習」を学ぶためには次の5つのポイントを理解することが必要となる。

#### 【資料 1】 枠組み演習のポイント

1. イシューを押さえる
2. 主張－根拠－具体例のセットを作る
3. 枠組みを考える
4. 質疑応答のコツ
5. 演繹・帰納を使って主張や根拠を作る

9) NC デザイン&コンサルティング株式会社代表取締役、ビジネスアーキテクト、グロービス・マネジメントスクール講師。



演習系の少人数授業において学生を議論させると、途中から論点がずれてしまうために議論が成果を生まないケースが散見される。大学における学びや社会における活動に重要な意味を持つ議論に関して、論点がずれてしまうことは致命的な問題である。このような致命的な問題を避け、議論を生産的なものとするために「イシューを押さえる」ことの重要性を学生は認識する。「イシューを押さえる」ことの重要性を認識するためのグループワークとして、「テナントビルのエレベーターに関する不満の問題解決」をテーマとした課題が出される。これは、オフィスビルでテナントの増加に伴い生じてきたエレベーターに関するテナントからの不満をどのように解決するかを考えさせるワークである。最初に時間制限を設けて、できるだけ多くの解決策を提示させる。ここで提示される解決策は種々雑多であり、「エレベーターの速度を早くする」、「エレベーターの台数を増やす」、「階段を使用させるキャンペーンを行う」などが出てくる。これらはいずれも「エレベーターに対する不満を解消する」というイシュー（課題）に対する解決策である。

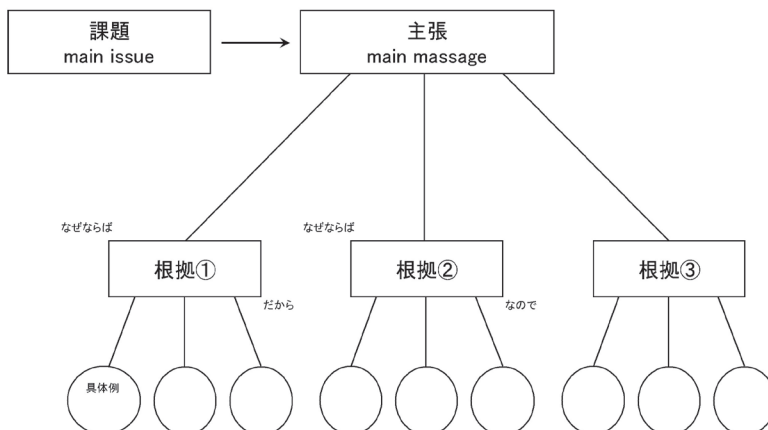
たとえばここで、解決策を複数出さずに議論を開始した場合、「エレベーターの速度を早くするためにはどうすればよいか」という議論になる可能性がある。このような議論は、イシューを狭くとらえすぎており、「エレベーターに対する不満を解消する」というイシューを解決するに至らない。反対に、イシューを広く捉えすぎて解決に至らない。また、「ビルを潰して、エレベーターをなくせばよい」といった解決策の提示は、そもそもイシューがずれてしまっている。

「イシューを押さえる」ためのグループワークでは、イシューの捉え方によって解決に至る可能性が異なることと、イシューとは「自分の考えたいこと」ではなく「いま考えなければならぬこと」であることを学ぶ。特に後者は、クリティカル・シンキングにおいて「相手の立場に立ってものを考える」ことが解決に結びつくポイントであることを示している。この点は、学生にとって頭で理解していても、実際には実践に結びつかないことが多い点であるため、ラーニングスキル演習Ⅱ(EC)を通じて一貫して重要視されている。

「イシューを押さえる」ことの重要性を理解したら、次に「主張－根拠－具体例のセットを作る」ことを学ぶ。議論の際に意見（主張）を説得的にするためには、論理的であることが求められる。意見（主張）を論理性のある構造にするためには、主張を支える根拠が必要であり、根拠を説得的にするためには具体例があることが必要であることが説明される。イシューに答えるために「主張－根拠－具体例」のセットがそろった枠組みを作ることが重要である。

上記の「主張－根拠－具体例」のセットを作ることによって説得力のある論理構造が出来上がるのが理解できたら、実際に「枠組みを考え」てみる。「枠組みを考える」際に用いられるのが【資料2】のようなピラミッドストラクチャーである。

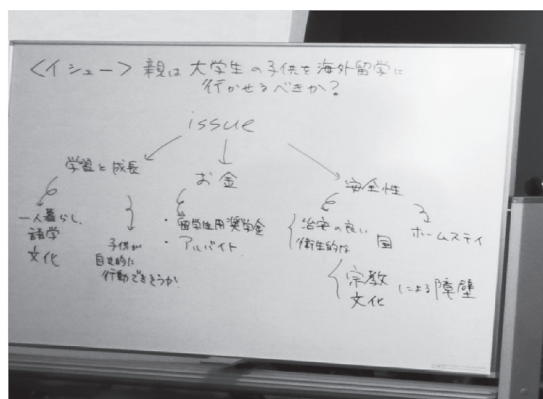
## 【資料2】ピラミッドストラクチャー



ここまでで論理的にものを考えるための枠組みの基本的構造が説明されることになる。基本的構造を踏まえたうえでさらに、論理性に基づいて問題解決に結びつくための議論を確実にするためのポイントとして「質疑応答のコツ」が説明される。特に、「まず、質問内容の復唱」をすることが重要である。議論の相手の質問内容を的確に要約して復唱することで議論の場に共通の前提や認識が生まれ、イシューを押さえることに役立つ。また、質問内容の復唱は質疑と応答をしっかりと噛み合わせることにつながり、議論を生産的に前進させることになる。そして、最後のポイントとして、主張や根拠を作る際の演繹的思考と帰納的思考の違いや特徴が説明される。3番目のポイントであるピラミッドストラクチャーを確実に作るためのポイントである。

以上の5つのポイントを理解して、学生は枠組み演習のグループワークとして次の課題に取り組む。課題は、「海外留学に行くことを親に説得するための枠組みを考えてください」というものである。多くのグループで最初は「海外留学に行くべきか?」という学生自身が主語となるイシューを設定する。しかし、担当講師が「イシューは『いま考えなければならないこと』を考えるものであり、それは誰が考えることなのか」について注意を促すと、【写真4】のように主語が「親」となるイシューを全グループが設定できるようになる。

【写真4】の枠組みは、主張-根拠-具体例が基本的にできあがっている。ラーニングスキル演習Ⅱ(EC)で



【写真4】枠組み演習の課題に取り組んだ成果

は第1日目 (Day1) の終わりには、すべてのグループで【写真4】のレベルまで到達することができるようになる。

#### 4-2 分析, 問題解決

第2日目 (Day2) では、Day1 に修得したピラミッドストラクチャーを、より確実に問題解決に結びつくものとするための、つまり論理性を高めるための方法として分解・分析と問題解決のステップ (ロジックツリー) について学ぶ。分析, 問題解決のためのポイントは次のとおりである。

##### 【資料3】分析, 問題解決のためのポイント

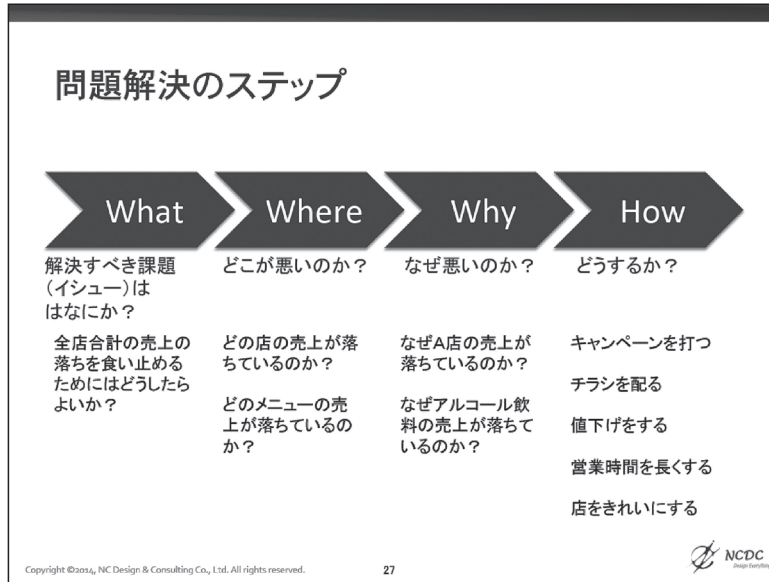
1. 問題解決のステップを守る
2. 分解して悪いところを絞り込む
3. 白黒がはっきりする分解の切り口を考える
4. なぜなぜ分析のコツ (アウトプットとセット)

問題解決のステップは【資料4】のように説明される。

「What」(解決すべき課題(イシュー)はなにか?)は、Day1 で紹介された「イシューを押さえる」にあたる。「Where」, 「Why」は Day2 で新しく出てくる概念である。「How」は Day1 ではイシューを押さえた解決策としてある程度秩序なく羅列していたものを、「Where」や「Why」の分析に基づいて整理した解決策として Day2 では認識される。よって、「Where」と「Why」についてポイントの2と3が、「How」についてポイントの4が関連してくる。Day2 では、主にポイントの2と3についてグループワークをしながら学び、Day2 の終わりには分析に基づいた問題解決の枠組みがある程度提示できることが目指すべき到達点となる。

そこで学生は、【資料5】のような課題に取り組むことによって、分析の方法を学び、分析に基づいた枠組みを提示できるようになっていく。

## 【資料4】 問題解決のステップ（ラーニングスキル演習Ⅱ（EC）Day2 テキスト 22 ページ）



## 【資料5】 分析と問題解決の課題（ラーニングスキル演習Ⅱ（EC）Day2 テキスト 23 ページ）

## 中古車販売A社

A社は首都圏に10店舗の店舗を持つ中古車専門店。前年より売上が落ちてきている。あなたは本社の営業統括マネージャー。売上低下の原因を探ることにした。

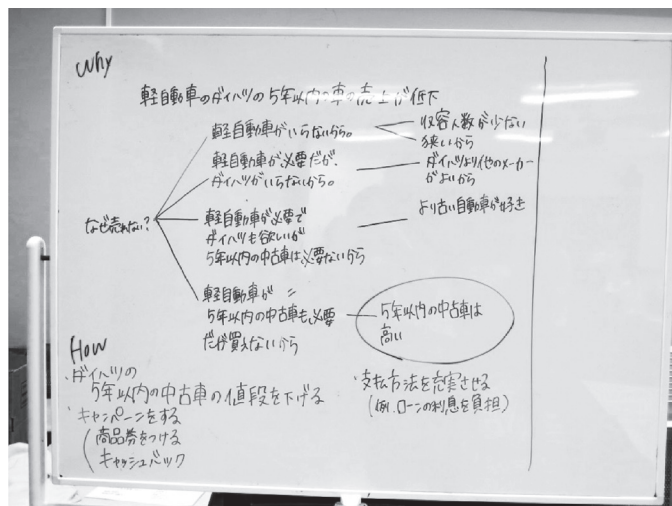
さて、どうしますか？

Copyright ©2012, NC Design & Consulting Co., Ltd. All rights reserved. 12



【写真5】【資料5】の課題に取り組む学生の様子

分析の方法については、特に、「もれなく、だぶりなく」分析することによって論理性を補強する方法を身に着ける。その結果、Day2の終了時からDay3冒頭にかけて【写真6】のような成果が出されるようになる。



【写真6】分析、問題解決の課題に取り組んだ成果

【写真6】から明らかのように、ラーニングスキル演習Ⅱ(EC)の前半までで、学生は分析に基づいた問題解決のための枠組みを提示することが可能な能力を身に着けるようになる。演習の後半では、前半において獲得した能力をもとに、より現実に近いビジネスモデルをグループで検討する。ビジネスモデルは下記の条件のもとに課題として提示される。

**【資料6】 ビジネスモデル課題の制約条件**

1年間で500万円貸与  
3年後に最低500万円返却  
資金500万円とメンバー全員参加のもとで6か月後にはビジネスをスタートさせる計画を立てる

ビジネスモデル課題について Day3 と Day4 のうちほぼ1日を用いてグループワークを行い、Day4 の後半でグループごとにビジネスモデルのプレゼンを行う。プレゼン内容について学生同士の質疑応答や担当講師によるコメントが行われ、ラーニングスキル演習Ⅱ (EC) において学んだ内容の振り返りと定着がはかられることになる。

**4-3 教育効果測定**

ラーニングスキル演習Ⅱ (EC) では担当講師に依頼し、演習実施による教育効果の数値測定を2013年度について行った。

効果測定は、演習の事前と事後にそれぞれ同一の課題を課し、学生個々の能力の変化を測定する方法で行った。課された課題は「自分の主張を論理的に文章化するための課題」であり、効果測定値の区分は【資料7】のとおりである。

**【資料7】 2013年度ラーニングスキル演習Ⅱ (EC) 事前事後課題の効果測定値区分**

- 1：自分の思いをかいているだけ
- 2：枠組みはあるが、その論理性は乏しい
- 3：枠組みがあり、客観データの補強がしてある
- 4：枠組みが適切であり、客観データの補強がしてある
- 5：読みやすさなども配慮があり、学生としてここまでできれば十分

教育効果測定の結果は【資料8】のとおりである。

## 【資料8】2013年度ラーニングスキル演習Ⅱ（EC）の教育効果測定結果

| 学生 | 演習後   | 演習前   |
|----|-------|-------|
| 1  | 3     | 2     |
| 2  | 2     | 1     |
| 3  | 2     | 1     |
| 4  | 4     | 2     |
| 5  | 4     | 2     |
| 6  | 2     | 2     |
| 7  | 2     | 2     |
| 8  | 2     | 1     |
| 9  | 4     | 1     |
| 10 | 4     | 2     |
| 11 | 3     | 2     |
| 12 | 2     | 2     |
| 13 | 3     | 2     |
| 14 | 3     | 2     |
| 15 | 5     | 2     |
| 16 | 4     | 2     |
| 17 | 5     | 1     |
| 18 | 3     | 3     |
| 19 | 2     | 2     |
| 20 | 5     | 2     |
| 21 | 5     | 2     |
| 22 | 4     | 2     |
| 23 | 3     | 1     |
| 24 | 4     | 2     |
| 25 | 3     | 1     |
| 26 | 5     | 2     |
| 平均 | 3.385 | 1.769 |

【資料8】をみると、全体として大きく論理性が向上したことがわかる。評価の平均が1.769から3.385と上昇した。また、演習前は論理構造の骨格となる「枠組み」がない文章が数名存在していたが(採点1の学生)、受講後には枠組みがない文章は1名も存在していなかった。さらに、演習後には客観的なデータで自分の主張を補強している学生が何名も見られた(採点3以上の学生)。論理性という基準で見たときに、ラーニングスキル演習Ⅱ（EC）の教育効果は確実に存在していることがわかる。そして、そのような結果は、ラーニングスキル演習を導入する経緯において目的とされていた論理的思考能力形成が、演習実施によって実現されていることを示すものである。

## 5. ラーニングスキル演習を実施した教育効果と今後の課題

最後に、4. でみた教育効果の数値測定結果を含めた演習実施の教育効果についてまとめ、

さらに今後の課題についてふれることとする。

ラーニングスキル演習の教育効果は、3. および4. でみたようにⅠ・Ⅱともにあがっていると考えられる。ラーニングスキル演習Ⅰ(ⅠC)ではコミュニケーション能力とタイムマネジメントスキルを身に着けることにより、大学生活のみならず卒業後の社会生活においても基礎となるいわば「常識」ともいえる能力が備わるという教育効果がある。「常識」とはなにかという点を厳密に定義することは難しいが、たとえば日々の受講態度や就職活動における「社会人基礎力」などで代替して可視化することが可能である。ラーニングスキル演習Ⅱ(ⅡC)では、クリティカル・シンキングの手法を学び、グループワークを通じて実践することによってプロジェクトが初発に意図していた論理的思考能力が備わるという教育効果がある。論理的思考能力は2.において指摘したように、プロジェクトでは以前より重要視していた学生が身に着けるべき能力であり、また、社会においても高く評価される能力である。

以上のような能力をラーニングスキル演習ⅠおよびⅡを通じて学び、獲得したⅠC生が、実際にはどのような人材となりうるのかについては、演習開始時点が2012年度であることから現時点では総合的に評価するには日が浅い状況である。総合的な評価には慎重にならざるをえないが、部分的には次のような事象として評価すべき側面が教育的効果として現出している。たとえば、2014年度4月初に和歌山大学経済学部は史上初めて新入生全員参加のオリエンテーション合宿を行った。この合宿は新入生が和歌山大学経済学部生としての自覚と帰属意識を持ち、主体的に4年間の学生生活を送ることを意図して実施されたものであった。2014年度は初回であり、前例がないために企画および実施運営上さまざまな困難が生じたが、合宿の準備および当日運営のプロセスのなかでⅠC64期グローバルユニット生9名がファシリテーターとして多大な貢献を示してくれた。このような効果は、基礎演習Ⅰ・Ⅱ(ⅠC)および2年次のユニット演習Ⅰ・Ⅱ(ⅡC)にラーニングスキル演習Ⅰ・Ⅱ(ⅠC)をリンクさせることによってもたらされたものと考えられる。つまり、ラーニングスキル演習と前期・後期に通常開講されている少人数演習系授業を組み合わせることによって、学部全体をリードするような存在としてⅠC生を教育する効果が発揮されたのである。

ⅠC64期は2012年度に初めてラーニングスキル演習を受講した学年であり、ⅠC64期が現在のところ学部全体をリードする存在として育ちつつあることはラーニングスキル演習の教育効果が評価されるべきものであることを示していると考えられる。このことからラーニングスキル演習は今後も継続して開講していく必要があり、開講実績を積み重ねることで経済学部全体にプラスの影響を及ぼすことが予想される。

ただし、ラーニングスキル演習の教育効果を確実に発揮するためには、通常の少人数授業(基礎演習やユニット演習)のなかでラーニングスキル演習における学びを定着させる仕組みが必要となる。ラーニングスキル演習において学生が獲得する能力は一度身に着ければそれでよいというものではなく、いわば「らせん階段」状に一度学んだことをより高いレベ



ルで再学習し続けていくことで能力として学生のなかに定着していくと考えられる。そのため、基礎演習やユニット演習においてEC担任がEC生に対してラーニングスキル演習の教育内容を再確認させるような行動や課題を課すことが重要となる。これを実現するためには、EC担任のラーニングスキル演習に関する理解と協力が不可欠といえる。

また、プロジェクトの初発の意図でもあるEC生以外の経済学部生全体にラーニングスキル演習の教育を拡大させていくことも今後の課題といえる。拡大のためには主に人的資源の問題が高いハードルとなる。ラーニングスキル演習を現在担当している染屋氏、早津氏とともに企業研修などの本来業務の合間をぬってそれぞれ4日間の集中講義を担当している。学部全体に教育を拡大するためには担当講師を現在の2人からさらに増やす必要が当然あるが、現状において人員増加は強い制約があるといわざるをえない。このような今後の課題をクリアする可能性がある方策としては、ラーニングスキル演習を受講済みのEC生の活用が考えられる。上述のような新入生合宿におけるEC64期グローバルユニット生の活躍は「EC生の活用」の1パターンである。このような「EC生の活用」を通常の講義やゼミナールを含む学部教育全体において実現するための仕組みについて検討する必要がある。